〈煤煙事件〉をめぐるメディアの言説編成

――女学生における〈性（セクシュアリティ）〉と「知」――

呉　聖淑

はじめに

本稿は明治四一年三月にエリート青年男女が起した情死未遂事件、あるいは心中未遂事件として社会に大きな関心と反響を呼び起こした、いわゆる〈煤煙事件〉[1]をさぐる前段階の作業である。この作業がどうして必要なのか。それは、この事件を報道したメディアの中ですでに共有されていた女学生に対する言説が、この事件を報道する記事から読みとれるからである。したがってこうした共有されていた言説から、事件当事者の女性がどのような文脈で語られて、その人物がどのような新しさをもっていたのかがあきらかになると思われる。本稿ではこの事件の分析を通してすでに文化的・社会的言説において語られてきた女性――特に女学生――の表象をさぐるつもりである。

まず、その方法として考えられるのは、そのような女性表象がどのように生産・共有され、変容していったのかという点である。ある表象が共有されるようになる文化を形成する役割を担ったのがメディアである。明治二〇年代から発展してきたメディアが女学生の表象に深くかかわっていたことが報道記事から予想できる。本稿は、このメディアの言説を通してどのような変容を経て明治四〇年代の女学生が表象されるようになったのかを検討する。このような具体的事例を通して、文化というものがある表象をどのように生産・共有され、変容していったのかというプロセスを確認することができるはずである。

ここでは特に女学生に対する言説が、女学生自身の〈性（セクシュアリティ）〉やあるいは自己探求の「知」（哲学の知）から疎外されて

きた点に焦点をしぼって検討することにしよう。

一、「所謂女学生」に関するメディアの言説編成

明治四一年三月二三日、『東京二六新聞』は、「令嬢紛失」という見出しで〈煤煙事件〉を他の新聞よりもいち早く報じているのだが、それにはおきまりのごとく「……会計検査官の娘……、……女子大学卒業生……」という平塚明子の身分や家柄などの詳しい情報が載せられている。しかしここで注目したいのは、父親の発言から明子という女学生に関して当時流通していた二つのコードが認められることである。

春子（二十二）二十一日夜十時頃家人の知ざる際に家出を為し今に其行方の判明せざる為め同家の心痛一方ならず、万一華厳の瀧に赴きはせすやと…（中略）…女子大学家政科を卒業せし後は家事の手伝を為し居りたるが性極めて温和して少しも現今の所謂女学生らしき所なく別段親の目を忍びて男と関係を結ぶが如き風は見えざりしとは両家の云ふ所なり然れば表面よりは恋の儘ならぬを喞ちしなりども思はれざれども此処に注目す可きは春子が美人なるにも拘らず今日迄未だ嘗て縁談の一度も有らざりし事なり（春子は明子（はるこ）の誤記：筆者注、傍点：筆者）（『東京二六新聞』、二三日）

問題のコードをさぐるには、父親の「少しも現今の所謂女学生らしき所なく」という発言から、娘の明子が「所謂女学生」ではないと強調していることに注意すべきである。どうして父親はこのように強弁するのか。それは、「別段親の目を忍びて男と関係を結ぶが如き風は見えざりし」という発言から、いわば男との恋の問題で悩んで自殺するような堕落した女性ではないと強調したいがためである。父親からすると、明子は「家政科」を卒業し、「家事」を手伝い、「性極めて温和」である。このような良妻賢母になりうる要素が彼女を「所謂女学生」から切り離す条件となっている。ここから言えることは、父親の眼から見られていた明子は良妻賢母の教育に従順な女学生であるから、父親の意志からはずれて男と恋におちいるような女性ではないということである。この父親の言葉からは、一方に家父長制家族を支える良妻賢母型の

女性を教育する制度に従順な女性像、もう一方にその制度を逸脱する堕落女性像がうかがえる。

父親の言葉の中の二つの女性像のうち、問題は後者の「所謂女学生」である。このメディアの言説は父親の言葉を信じようとしながらも、明子が「所謂女学生」ではないし、「美人なるにも拘らず」明子にまだ縁談が一度もなかったという謎めいた事実があることである。もし彼女が良妻賢母を望むならば、「美人」である以上、もうすでに縁談がいくつもあって当然なのではないか。

なぜ明子は結婚し良妻賢母という女性の生き方を望まないのか。メディアが疑問を抱いたのは父親の言葉の矛盾ではなく、明子の思想だった。この謎を追求する前に、当時のメディア言説である「所謂女学生」と「知」を獲得する〈エリート女学生〉という文化コードをたどっておこう。

1　知的芸者としての女学生

明治二〇年頃から女子教育を受ける女学生たちが社会に目立つ存在として現れるようになる。その女学生について、特に、教育新聞・学生新聞として知られている『読売新聞』では、明治二三年から「女学生の醜聞」という見出しで集中的[2]に報じられている。同紙には「女学生の弊風[3]」（明治二四頃）、「女学生の堕落[4]」（明治三五年以後）といったような別の言葉で言い換えられているところからすると、メディアは「女学生」の悪しき一面を、それが突発的・偶然的な事ではなく、すでに常態化した社会悪の一つとして報じていることがわかる。

具体的に言えば、そもそもこれまでの「女流風俗」は、化粧、美貌、風采などの「身体修飾術」を凝らして仕事をしている芸者が主導してきたのだが、今では女学生が「勉強は髪の形ちの研究」あるいは「眉毛の剃り付やう鼻の頭へ白粉の塗」（『読売新聞』明二三、二、二〇）る化粧法の工夫をして「女流風俗」をリードするようになったことを伝えている。明治四〇年になると、女学生風は「挑発的」（『読売新聞』明四〇、三、三）なものとして流行していたという。それはメディアにとっては悪しき面と認識されたらしく、その面が男を誘惑するために工夫する身体として芸者的な一面として強調するようになった。

なぜそうなるのか。その背景には女学生の売春問題があった。実際の事例で早いものとしては、「女学生の売春」神田

警察署が拘引」（『読売新聞』明二、八、五、二〇）という記事が指摘できる。しかしこの「売春」という言葉は微妙であって、メディアの三面記事の興味対象としてつねに女性の〈性〉があった。女学生が「神聖なる恋愛」として男性との自由な交際を主体的に望んだ場合があったとしても、メディアの側ではそれを売淫ととらえ「花柳病」の蔓延を危惧するという論調で伝えることもあったことに注意したい。この女性の〈性〉は家に帰属するという前近代から続く観念から考えると理解しやすい。女性の〈性〉は家の継承に必要な子（男）を生産するためにある。そのために純潔が要求される。つまり、女性の〈性〉は結婚を前提にした家制度のなかで許されるものとして、母の役割の〈性〉のみが正当化されたといえる。したがってそこからの逸脱はすべて「売春」「売淫」であった。それは、女性の〈性〉というものに「人生の快楽と幸福とを共有せらるべく色欲の満足」という点を認めず、「子孫繁栄の大慶を負ふ」点のみを強調した結果である。

その背後には性を家に従属するものだとする前近代的な家制度とその制度に支配される女性の〈性〉という、抜き難い観念があったとみてよい。それを言い換えれば、女性は自己の〈性〉から疎外されていたということである。男性中心のメディアの関心が女学生に向けられた場合、教養のある女性とセックスが結びつけられ、新たな興味が生まれたと考えられる。当時の小説の女主人公が娼妓芸妓から女学生、学校出の細君あるいは教育ある婦人へと変化していったのは、女学生のセックスへの関心が世間に生まれていたからであった。この時期、メディアは「女学生の堕落」についての言説をたびたび取り上げるようになっていた。こうした関心の偏りは、すでに言及したように、女性の〈性〉を、家制度が女性に押しつけている従順・貞操からの逸脱、すなわち当時の女学生の教育を支配した「男尊女卑の生活秩序」[6]に基づいた良妻賢母主義からの逸脱ととらえる視点によって生じたものなのであり、特に性の乱れへの好奇心によって、さらにその傾向が強められた。

これらのメディア言説からうかがえる「所謂女学生」のコードを整理すれば、それは女学生―男女関係―ラブという、今日からみれば、ごくふつうの女性の恋愛行動が、当時のメディアでは男女交際―花柳病―売春―芸者というコードで認識されるようになったことが見てとれる。たとえば次のような事例において、そのコードが典型的に示されている。

曰く女学生の敗徳曰く密売淫の醜声…（中略）…年若き二人の男女が睦まし気に手と携へて返ッて逃げ出せし平治と嘲るものの如く…（後略）…　（「女学生の醜聞」、『読売新聞』、明二四、二、一六）

近時の新聞紙頻々として女学生の堕落を伝ふ。女学生が女子の貞操を尊重せずして動もすれば淫縦に流れ。甚だしきは即ち花柳病に罹り。更らに甚だしきは売淫の醜事をすら為すものあることは確実也…（中略）…軽浮なる熱情に趨りて恋愛の自由神聖を唱ふるが如き。…（後略）…

（「女子教育問題」、『中央公論』、明三九、一六）

青年学生と女学生との間の関係は甚はだ密接の関係にして父母兄弟の知らぬ事実隠蔽され居れり、青年学生の半数が花柳病ありとすればそれが女学生と関係する故女学生も病毒に感染し居るに相違なく之等の女学生が将来賢母良妻だるの資格を得べきや如何現に信用ある某々女学生の生徒が密か尿道病、黴毒等を憂ひて診を乞に来るもの頻繁たるにあらずや中には自ら恥ぢて医師に来たらぬも多からん而して此花柳病を持し女学生は他の病毒なき青年に再び移し…（中略）…今日の信用ある女学高の女学生に於て此事あるをみたる以上…（後略）…（『万朝報』、明三九、七、二〇）

これらの記事で注目されるのは、「年若き二人の男女」の交際がまったく反社会的な「敗徳」あるいは「売淫」と同列に並べられているということである。男女交際が女学生の本分（勉強）からの逸脱とされ（「敗徳」）、極端な場合、売春と結びつけられてしまうというところに、前述した女学生に関する文化コードがつらぬかれていることが確認できよう。その「売春」とともに、逸脱を阻止するための女性への脅迫が「花柳病」なのである。この「花柳病」は、女性の「生殖器に障害を生じ妊娠するも半産し易く仮令無事に分娩するも其の児は非常に虚弱のもの」[7]である危険性があるという警告になる。ここにおいて西洋の性科学的な視点から、女性が自己の性を所有しようとする（自由に扱う）ことを反社会的な方向でとらえていることがわかる。

ここで確認しておきたいことは、恋愛と売春の差異を決定づけるのは、男性の視点からみて〈性（セクシュアリティ）〉を女性の主体性と結びついているものとするか、それとも男性の支配対象や国家の管理する所有物としてみなすかにかかっており、結果的に女性が自己の〈性（セクシュアリティ）〉を所有しようとする（自由に扱う）場合、それは反社会的なこととしてとらえられてしまうということになっている。こうして新聞や雑誌メディアでの「所謂女学生」はいまだに女性の〈性（セクシュアリティ）〉が本人の主体によるものだと認めていないことがうかがえる。それゆえに「所謂女学生」という言説は、当時の芸者に代わって女性風俗を先導

してはいくものの、その一方で自由で主体的な男性との交際を「売春」とみなされてしまう。男を誘惑する堕落女学生は、「芸者」と少しも変わらぬ存在として認識されるようになり、知的芸者として位置づけられるようになっていったのである。

2　男学生化する女学生

これまで論じてきた知的芸者に代表される女学生に関する文化コードが当時の社会にとって負の価値しかもたなかったことは確かだろう。その文化コードを支えていたものが男性中心の視点、家父長制の家制度、そして良妻賢母を目的とする女子教育という制度であったことも見てきた。しかし次の記事群が伝える女学生に関する言説ははたしてどうとらえるべきだろうか。

身持自然と堕落して言葉つき鄙しくなり行き大口きくにも恥ることなく…（中略）…一本二本又三本行銚子の替りと命ずるも男らしき語気逞ましく酔ふて…（後略）…　（「女学生の醜聞」、『読売新聞』、明二三、一一、一〇）

○失礼なんだよ○君○僕○無礼千万だわー○君遊びに来玉へな○其他男学生の用ゆる常語更に又少しく注意して聞けば○ミス○ミセス○ハズバンド○スウヰトホーム○理想のホーム○ラブ○ワイフ…（中略）…また彼等の一部には小説を愛読する結果言語の中に英語を交へ漢語を使ふ者あり畢竟小説家が女学生の言語を写せしにはあらで女学生が小説家のために左右さるゝと云ふ証拠…（後略）…　（「女学生と言語」、『読売新聞』、明三八、三、十六）

日本現在の女子教育法は多くは米国流なり、此点よりして日本の女学生は主として米国化せられつゝあるが如し……徳操を軽んじ独立心を尊び柔順を後にして活溌を先とするの幣は今の鵺の如き女学生を生めり……女学生の堕落は日本全国を共通せり…（後略）…　（「堕落に理あり」、『中央公論』、明四〇、一）

男学生がストライキをやれば、女学生も負けじとストライキをする、男学生が寄宿舎の賄征伐をやれば女学生も其所

退け此方がモット花々しくやつて見せると出る、…（中略）…今のように男のやる事は何でも女がやり、張り合ひになつてやり、意地になつてやるような時代の傾向…（後略）…　（新声同人、「時代裸観」、『新声』、明四〇、八）

学問をして男性的となつてはいけませむ…（後略）…

（三輪田真佐子、「私の女子教育の方針の六箇条」、『新公論』、明四一、六）

このように、明治四〇年前後になると、女学生は「〇失礼なんだよ〇君〇僕」などの「男学生の用ゆる常語」や「英語を交えた言語」を使用するようになってきたという。女学生の男学生化とよんでもよいこうした現象は、現代の文学・文化批評理論でいうトランスジェンダーの現象ともいえる。なぜ女学生がジェンダーを越境しようとするのか。その理由として第一にあげられるのは、〈性（セクシュアリティ）〉から疎外されてきた女性がそれらを自己に取り戻そうとする意志がパラドキシカルな衝動となって現れたと言えよう。その現れが家父長制という家制度や良妻賢母の女子教育への反発だということが指摘できる。当時の女子教育では、女子は「女らしい女なることを要」され、夫と子のために「犠牲の念を有すること」、節操が「婦人の生命」であること、「道徳の維持者」、「柔順でなければとても婦人として責任を尽すこと」[8]ができないことなどが強調された。にもかかわらず女学生は、「徳操を軽んじ独立心を尊び柔順を後にして活溌」[9]であるとメディアは批判している。このようなメディアの言説からも、女学生の男学生化は家に奉仕・犠牲する従順への反発、家父長の絶対的意志による従属への反発の現れであると見てとることができる。第二には、より積極的な意味において、女学生が主体的に個人の自由を追求するとともに、社会的・文化的行為として「知」から疎外されたものを獲得すること（二節で考察する）があげられ、ここにおいて女性が男性に匹敵したいという男女平等を欲望し始めたということが指摘できる。そして第三には、個人としての主体性と自由を追求することが西洋の近代女性に近づくこと、さらに言えば、西洋的価値観へのあこがれそのものであるということ（三節で言及する）も指摘できる。こうした状況をメディアでは女性が西洋化（米国化）されていると批判的にみていることに注意したい。西洋的価値観ということは自由・平等なる個への追求ということである以上、それは身体や行動の男学生化ということにつながるのである。

こうした「所謂女学生」の言説は、明治初期の西洋の教育による「男女同権的教育の必然なる結果」[10]であり、その弊害

とともに「下宿」の弊害をあげることができる。メディアは、こうした事態の原因を分析し、修身を基として国粋と外粋との折衷する教育法、すなわち「日本の女子の為に適当なる教育法と定る能はざること」[1]の必要性を告げている。教育によって女学生は、言葉遣いや行動から男学生化し、男学生と「張り合」う「意地」の女性、すなわち「従順」「温順」とは遠く隔たっていく女性になったのである。そこに男性中心のメディアの警戒感がみえることはいうまでもあるまい。このような女学生の男学生化は教育・「学問」によるものであることは確かである。このような男学生化は、実は多岐にわたって意味作用していると思われる。

二、「知」（哲学の知）を獲得した「女の藤村操」の登場＝〈エリート女学生〉

前節で考察してきたように、「所謂女学生」には二つの文化コードが形成されていたと考えられる。一つは知的芸者としての表象である。もう一つは男学生化する女学生像である。それがすべて身体というものとして女性の品行に関するものだとすれば、ここで考察したのは、女学生の思想や精神、すなわち知性はどのように認識されていたかを論じていきたい。

> 智力の発達して居る方は、普通成年時期に達します頃には必ず人生問題、宇宙問題という様な懐従煩悶の難関があるので、之を通過しないものは少いと申すことですが、其様なことは私の知る限りでは女子には無いのです…（中略）…私は女子はどこまでも智の動物ではなくて情の動物であると思ひます…（中略）…智力で独立し、男子と生存競争をしやうなどゝいふことは間違つて居ります…（後略）…　（福田英子「男女学生交際論」『中央公論』明三九、七）

この福田英子の見解を端的に言えば、女性には「智」（＝「知」）がないということである。彼女が女性解放運動家であり、女性の覚醒を促がし、その言説でもって影響力を与えていたことを考えれば、この論調はアイロニーであるといえる。当時のメディアでは、女は「情」の動物であること、だから堕落しやすいものであるという言説が支配的に流通していた。したがって、女は「智の動物ではなくて情の動物である」という性差から、人生懐疑・煩悶を惹き起こすことはないとい

うことである。福田の言説がこのようなメディアの言説編成から大きな影響を受けていたことをあきらかである。そうした男性中心の福田のまなざしは、男性に劣らぬ能力をもった女性が家父長制社会で生き残るための有効な手段であったかもしれない。[12]

ところが、ここで注目したいのは、福田英子の使う「知」という言葉である。それはあきらかに当時の哲学の知を意味しているからである。そこであらためて福田英子の言説の論旨をいま一度見直してみると、「知」というものが「人生問題」・「宇宙問題」に対する懐疑・煩悶を起して自殺をもたらすとすれば、そのような「知」は女性にはないと言っていることに注目しなければならない。したがって、彼女の言説の背景には、「知」をもつということはまさにこうした懐疑・煩悶を抱くということであり、哲学の知から生じる思想あるいは思考が青年を死にいたらしめる原因であるということである。

こうした言説は、明治三六年、宇宙の真理や人生に煩悶し、「人生不可解」という言葉を遺して日光の華厳の滝で自殺した藤村操から由来する。当時メディアでは、俊秀の一高生藤村操が、「専ら哲学宗教文学美術等の書を研究」[13]した結果、煩悶・懐疑に陥って厭世家になって自殺したと報じられていた。その藤村操の自殺は「俊秀」「哲学」「人生問題」「宇宙問題」「厭世自殺」「華厳の滝」という記号とむすびついて、典型的な知的青年エリートの煩悶としてメディアに広がっていった。つまり、「哲学少年」と名づけられた藤村操の厭世自殺は、哲学による煩悶の結果であり、「知」の表象として流行し、藤村操現象まで惹き起こした。

明治三九年になると、男学生の領域だった「知」というものを女学生も獲得しようとするようになった。これが男学生化の一つの現象だったことは確かである。同年一月二十九日、『読売新聞』は女学生の自殺を「女の藤村操」という記事として報じている。このような女学生の自殺という事件はしばしばあったのだが、その記事はそれまで堕落女学生の恋愛問題による自殺として扱われていたのとはまったく異なる現象が起こったことをメディアも気づきだしたことを示している。その記事群を引用する。

明三九、一、二九　女の藤村操　私立山陽女学高2年生・松岡千代
二十六日、寄宿舎で自殺

同年、一、三〇　女の藤村操・松岡千代、十六歳の絶筆「悩める少女」

同年、二、五～六　哲学書禁制（五日）、神経衰弱症に注意（六日）

同年、四、一三～二六（四回）女学生の書簡と村上博士

某女学生が人生の目的及道徳の標準に就いて疑惑を起し煩悶の結果一たびは自殺を決したが、尚ほ死し得ずして、一書を村上博士に寄せ…（中略）…▲某女学生の文に答ふる書…（中略）…二十の春秋を僅か二三回を越へた人であらうと思はるゝ妙齢の女子にして、よくもかく文筆の自由を得られたのと思ひました。而も唯文章の美なるに感じたのではく、論理思想の明晰なるに関心したのであります…（中略）…その志のいと篤きことよと、大いに感心した次第であります

この記事群は、人生の目的、道徳の標準などに疑惑を起して煩悶の結果、自殺をはかった煩悶の女学生が登場したことを告知している。ここで注目したいのは、女学生に対して、「煩悶」「哲学」「論理思想の明晰」「神経衰弱」「人生」「厭世家」などの言葉と「文筆の自由」「文章の美」などの言葉が交錯していることである。前者が哲学、後者がどちらかと言えば文学であって、女学生が哲学と文学の「知」に参入しだしたことをメディアはとらえ、それを「神経衰弱」「厭世家」とむすびつけていった。こうしてメディアは彼女たちが自殺に至るプロセスを以上のようなコードによって言説編成していったわけである。

ここにおいて注目したいのは、これらの記事群にみられる「自殺」「哲学」「人生」「煩悶」「厭世家」という記号群が前掲した藤村操の自殺をめぐる記号群と重なっているということである。しかもそこでは、このような現象が単なる一過性の自殺事件で終わるのではなく、〈エリート女学生〉全体において藤村操現象のように流行となって相次いで起こる危険性が感じ取られていたのだ。実際、「平棄高等女学程度の女学生に対し其学科以外において人世観宇宙観の一般を窺知せしめ置くの必要あるをみとめこれを議題として全国女子師範学校校長会議に提案し」[13]たという事実があった。したがって、

学校では厭世少女の松岡千代の自殺事件をきっかけとして、その恐れを多分に感じて教科書以外の哲学雑誌の閲覧を厳禁するようになったのである。

このように藤村操の華厳の瀧への投身自殺を契機に生じた言説編成のコード化は、明治三〇年代の末から四〇年にかけて「知」を求める〈エリート女学生〉にも大きな影響を与えた。彼女たちの中からも藤村操が自殺にまで至った同じコードを追うかたちで世間に煩悶し厭世家となり、そして自殺する者も現れた。これを〈女の藤村操現象〉と呼ぶ。この文脈の中で、明治三九年に福田英子が女学生には「知」がないと発言した意図をとらえることができる。しかしその一方でメディアが物語っているのは、女学生の中でも〈エリート女学生〉（高等女学程度）によって代表されるような「知」を獲得し、自己の主体と自由において社会や道徳への懐疑を起こす女学生が浮かび上がってきたということである。

こうして明治三九年の頃から、女学生に関するメディアの言説編成に二つの相反するコード化が認められるようになった。一方が「所謂女学生」というコード化であり、いま一方が「知」を獲得する〈エリート女学生〉というコード化である。女学生にとって〈性〉と「知」は対立するものとされていた。明治三七年に出版された『男女の研究』[15]では、男女両性の根本的差異は生殖器にすぎず、「男子と女子とは本来絶対に相異るものにあらで、等しく、これ、人類なり」と書かれている。そしてまた「男女間の愛情はこれを恋愛と称し、色欲に伴うて発生せる純なる感情」であるという。ここでいう色欲とは性欲あるいは情欲とも称されるという。この著書が注目されるのは、女性においても性欲という〈性〉を認めていることである。「男子と女子とは」〈性〉においても平等だと主張する。その一方でこの性欲は理性の発達によって抑制することができるとも述べている。これは「知」が〈性〉を抑制できるということである。このように、女性の〈性〉が一方で認められるにつれて、そのことがかえって道徳と結びつけられると同時に、〈性〉と「知」を対立させるものと観念されるようになり、〈エリート女学生〉を悩ませていくのである。

三、〈煤煙事件〉の前後における「今の女」

明治四一年三月二三日、『東京二六新聞』の記事群に注目したい。第一面の「本日の主なる記事」の見出しをみると、「令嬢の紛失」（いわゆる〈煤煙事件〉）をはじめとして、「姦夫を斬らんとす」「外国行き醜業婦の一団」「大丸の二階で

女万引きの実演」など、女に対する記事が多くのスペースを占めていることがわかる。その傾向について、まず当時の知識人がどう認識しているのかを見ていこう。

何故に日刊新聞の三面記事は社会半面の実相なるか、情死、姦淫、詐欺強盗、窃盗、殺人、争闘、等あらゆる不義不徳の縮写図たる三面は、何が故に社会半面の実相であるか。試みに人よ是等三面記事の原因を捜れ、そは酒と女なり、女ありて酒あり、酒ありて女あり、しかも今や酒漸くその跡を断ちて、女ひとり三面記事の独裁君主となりつゝあるではないか、知るべし社会の裏面における人生の葛藤は、今や女に尽くると云ふてもよろしいであらふ。思ふに現代社会は女独りのさばる社会、未だ正躰の知れぬ女ののたうちまはる社会である。女の正躰が知れぬから女と云ふものが無暗に有難い、昔しの女は正躰が判つて今の女は正躰がわからぬと云ふのは、知識と云ふものが累ひをする結果である…（中略）…正体は朦朧たりだか、兎に角をとこもすなる日記てふものををんなもしてみんとてすなりてふ土佐日記のそれならで、男もすなる小説てふものを女も仕て見んとてすなりと云ふ時節…（後略）…

（山の人、「現代社会は自然主義」、『新声』、明四一、三）

この引用は人生の葛藤による現代社会の実相を「恰も活動写真の如く、転々、眼前に躍出」[15]するのが三面記事の使命であるというところに主題があろう。したがって三面記事は「不義不徳」を中心とする反社会的実相を暴露することを一つの任務としていると理解されている。この中でとりわけ注目されるのは、「不義不徳」の原因は「酒」と「女」にあるといっていることである。「酒」と「女」が、男を堕落させるという点において同質のものとみなされているところに男性中心の視点が見てとれる。酒色は、いうまでもなく男が溺れやすい代表的なものとされている。すると、女の「堕落」が追求されるという論調は実は、男の「堕落」する原因が女にあるとする責任転嫁の結果だともいえる。このように女にのみ割り付られる「堕落」という認識が、女学生に関する文化コードとして男女交際―花柳病―売春―芸者という観念連想を生成させていくのである。こうした女性表象は近代の知が生みだした女性の束縛ではあるが、その根源に女性の〈性（セクシュアリティ）〉が存在していることを見逃してはならない。女性の〈性（セクシュアリティ）〉が一方的に男を堕落させる原因とされ、すべての犯罪の原因ともされていく。それは男性中心の視点が作りだしたものということができよう。

男性の〈性（セクシュアリティ）〉の対象としての知的女性（女学生）は、実はこの明治四〇年前後にいきなり出現したわけではない。すでに明治二〇年頃から教育が普及することによって、女学生は社会の有力な集団として登場してくるようになっていた。まえにふれたように小説の女主人公が、娼妓芸妓から女学生、学校出の細君あるいは教育ある婦人へと変遷していったことからも、対象としての女学生への注視がその背景にあったといえる。こうした変遷は、男性にとっての〈性（セクシュアリティ）〉の対象が変化していったことを意味するのではないか。特に新聞・雑誌メディアが女学生という社会に新たに登場してきた集団を位置づけるため、頻繁に好個の対象として取り上げていたことからも確かである。たとえば、一節で考察してきたように、明治二三年から「女学生の醜聞」、「女学生の弊風」（明治二四頃）、「女学生の堕落」（明治三五年以後）という言い方が流布していたということがその例である。ところが、そのような女学生は明治四〇年前後になると、「所謂女学生」として表象され、〈男女学生（交際）＝神聖なる恋愛＝ラブ＝花柳病〉や〈男性化する女学生＝お転婆〉という負の図式がますます固定観念化していく。このように「女学生の堕落」という言説が広く社会に受け入れられたのは、彼女たちの「従順」「貞操」からの逸脱、特に性の乱れ、すなわち品行がその大きな理由であった。だとすれば、〈煤煙事件〉の前後における「今の女」はどのように表象されたのであろうか。本稿の最後に「今の女」を追っていきたい。

明治三九年から、〈エリート女学生〉は「文章」「文筆」の能力をもつ女性としてメディアから注目されるようになった。〈エリートの女学生〉に対するメディアのまなざしは「文芸の趣味が充分涵養されてゐる」[17]こと、そして女学校に文芸会が行われていることにむけられている。女学生が「読書よりは創作の方に多大の趣味を持って」いて、「現に文芸会の演劇でも学生等自身が脚本を作って之を舞台に上るといふ位だ」[18]という記事からは、多くの女学生が文学の創作を趣味としていたことがわかる。そこには男女同権を主張し、自立を目指して「男もすなる小説てふものを女も仕て見んとする」女性の姿が見えてくる。教育によって新たな思想を身につけ、高い文筆力を獲得した女学生は、自己の思想を自由に表現したいという欲望を抱くようになった。それは一個の主体的な個人としての希求であり、また自我のめざめであるともいえるだろう。そのような女学生の中から職業としての文学をめざす女性が登場するようになる（その代表的な存在の一人が平塚明子だが、明子と文学創作との関係については別稿に譲る）。このように、〈エリート女学生〉は文学という様式を通して思想を表現し、従属の存在としてしか認められていなかった女性を束縛する国家―教育―家という制度から逃れて経済的な独立（自立）することを望むようになった。

当時の社会において女学生が〈性〉と「知」を同時に併せ持つことは認められていなかったということはすでに指摘した。明治時代の女性に対する〈性〉は、良妻賢母として家制度に従うべきものであり、結婚の前提にある母性の面だけを強調したものであった。そうだとすれば、「所謂女学生」においての〈性〉は当然のことのように「堕落」と結びつけられるしかなかった。

ところが、女学生が「知」を獲得するようになるとともに〈性〉が他者（男）によって支配されている状況から抜け出すための闘いが、女性自身によってはじめられた。〈煤煙事件〉はまさに、そうした闘いの一つだったのだ。

明治四〇年前後のメディアによると「をんなひとりふるつてゐる時代」[19]の主人公である女学生はすでに考察した「朦朧」の存在であった。そのことは、負の意味を多分に付け加えながらも、強烈な自己主張・自己実現への欲求にあふれた女性がこの頃登場するようになったことを示唆する。それをメディア（男性中心主義）が嘲笑的にとりあげるようになったのである。「今の女」は男性に限られた哲学による思索、すなわち「知」をみずから手に入れることによって、自由で主体的な個人であることを欲求しだした。メディアではそのような彼女たちの行為を「のさばる」とか、「のたうちまはる」文学志望生といって揶揄したり、「正躰がわからぬ」女、謎のような女としてその登場を警戒するようになった。このように「正躰がわからぬ」「正躰が知れぬ」という女性の「知」への偏見が不思議な女という言説へまで変容していくのである。

このような「今の女」はいかにして生まれてきたのだろうか。まずここで考えたいのは、西洋の小説の女性主人公をモデルにして生まれてきたのではないかという点である。というのは、『蒲団』のなかでツルゲネーフの作品『オン、ゼ、イブ』（『その前夜』という作品の英訳名）に注意深く耳を傾ける女主人公である芳子の描写から、新しい女の生き方を探し求める日本女性の姿が読みとれるからである。それは、新しいタイプのインテリ女性の「ヘレナの感情に烈しく意志に強い性格と、其悲しい悲壮なる末路とは如何にかの女を動したか、芳子はヘレナの恋物語を自分に引くらべてその身を小説の中に置いた」[20]という場面である。ここで芳子（「今の女」）はツルゲーネフの主人公ヘレナと自分を比べている。このように「今の女」は西洋の女性をモデルに自己を形成していたのではないか。そしてまた、島村抱月が明治四〇年に単行本として出した『其の女』（英国美学者グランタアレンの作"The Woman Who Did"の翻訳）は死を「断行した女」として革命的な考えをもったハアミニア・バアトンという女性を描いたものだが、その中にも新しい女性モデルが見られる。彼

女は「自由恋愛」を主張し、「大胆なる思想」をもった女だが、自分の所信を貫くために遺書を残して自殺を断行する。この小説を『読売新聞』では出版界という欄を通して紹介しつつ、「今度も女学生などの喜んで読むものならん」[21]と評している。わずか一例にすぎないが、ここには「今の女」すなわち当時の女学生たちの自己形成の一端がうかがえる。「今の女」はこのような同時代の日本の文化・社会・国家・家などの旧習を離れた西洋の女性をモデルにすることで、時代におけるジェンダーの言説から逸脱する女性になろうと欲望するようになった。

一方、社会における女性（女学生）の存在獲得、「知」への欲望、それに自己表現・自己主張の願い、〈性（セクシュアリティ）〉の自由を求める女学生の願望は次第に大きくなっていく。その流れの中ではじめて女学生は「近ごろ新聞雑誌界論壇の火花となりぬ」[22]のだ。当時の雑誌の売れ行きをみると、『滑稽新聞』『東京パック』ついで『婦人世界』『ムラサキ』が続いている。購読者としては当然女学生が考えられる。そして、これらの雑誌を買う購読者には同時代の女性表象を共有しようとする意欲があったと思われる。そして特に、婦人誌の読者に「男子然も金紐（きんぼたん）の学生」[23]が多くいたという事実に注目される。男学生にとって婦人誌に登場する「今の女」が興味対象であったということは推定できよう。彼女たちの規制の制度や束縛から抜け出ようとするその姿勢が、男学生にとっては朦朧としている存在、正体の知りたい存在として浮上してきたといえるだろう。

このように、「今の女」は単にメディアの興味の的としてとどまるだけでなく、それはやがて青年たち（男学生）の直接的で個人的な興味にまで広がっていった。たとえばそのことは、「日刊新聞三面の恋物語は、女の正躰見度しの一念ではないか」[24]という記事からもうかがえるし、また、当時、東大出身の森田草平が平塚明子との〈煤煙事件〉について回顧したところからも読みとることができる。またこのことは、その事件について森田が告白したとき、夏目漱石が明子を評して「人情も道徳も支配しない彼方といえば、死よりほかに道はない。この世でそれを求めようとするのは無理だ」と言ったことにも対応していよう。このように考える者としては当然男性（藤村操のように）も考えられるが、しかし森田は死を決心した明子という「女の正体が知りたかった。本当にそれが見極めたかった」[25]と語っていることからもその一端がうかがえよう。

メディアやその読者である当時の青年たちの前には、「今の女」という、「知」を獲得し、またみずからの「知」を自由に表現したいという自己主張・欲望をもつ女性が登場してきたのだ。男学生にはそのような女性との交際（恋愛）に対す

るあこがれ、そして正体を知りたいという好奇心が働き、興味の対象として「今の女」に光があてられるようになったのである。

まとめ

明治初期の女性に対する教育は西洋風の男女同権的教育であった。それは一部で、女性を文化的・社会的に形成されたジェンダーから逸脱させ、女性を男性化する結果を生みだした。だが、それは女性において〈性（セクシュアリティ）〉と「知（セクシュアリティ）」から疎外されていた自己（自我）・個人を取り戻すことでもあったわけだ。それにもかかわらず、当時において〈性〉に関して自由であった男性のように、〈性（セクシュアリティ）〉の自由の獲得や性欲を認められていなかった女性が自由恋愛を求めようとすると、そうした女性はすべて過剰性欲を持った売春するような女性としてみなされ、知的芸者として表象されてしまったのだ。また一方で、女性が「知」を備えたことで人生に懐疑を抱いたり、煩悶したりし、それが文学に対する強い熱望へとつながっていったことは、メディアが言うところの〈女の藤村操現象〉をもたらした。そうした状態がすべて、「知」をもとめる女性を男性化させていたのである。

女学生たちは、男性教師による啓蒙的な教育を通じて西洋の文化や文学を学んだが、そのことは、女性の生き方を変えるような動きを女性の内部に起させるには充分であった。そして西洋文学の女性主人公から女学生は新しい女性の理想像を感じ取っていたことも想像できる。特に、日本において女学生の進歩（自己形成の自覚）は西洋の性科学の輸入から性的差異が崩壊しはじめるようになったことと強くむすびついているということも指摘できる。このように自己形成した「今の女」はメディアのみではなく、男学生にとっても正体を知りたいという好奇心を刺激する存在であったということがいえよう。

【注】

（1）事実として〈煤煙事件〉はこうなる。

明治四一年三月二二、会計検査院第一部第四課長平塚定二郎の次女明子（はるこ、二三歳、日本女子大学卒、後の平塚らいてう、本名明）

が家出した事件が家族に知られ、捜査がはじまる。ところが、その事件が一変する三月二四日、明子と文学士森田米松（二八歳、一高、帝国大学卒、森田草平）の二人が手を携え、呑気に栃木県の山奥である尾花峠を徘徊しているところを塩原村巡査によって取り押えられる。この事件を呼ぶとき、当時において当事者である森田草平がこの事件に基づいて描いた『煤煙』がまだ出てこなかったため、「禅学令嬢の事件」（万朝報）、〈明子事件〉（筆者）ともいうべきであるが、事件を指す言葉によって意味上のズレが生じることではないので、ここではこの事件についてよく知られているとおり〈煤煙事件〉という固有名詞をそのまま用いることにした。

（2）明治二三年二月二〇日から二八日にわたって一三件が報道されている。

（3）明治二四年九月五日から一二日にかけてシリーズ連載されている。

（4）社会問題化して「女学生の堕落問題について」という特集記事として当時の各界の有識者の談話が連載されていることが確認できる。

（5）大鳥居弃三・澤田順次郎、「男女の関係」、『男女の研究』、一九〇四年、六九頁、この本は明治三七年から三九年にかけて一一版を発行している。（『編集復刻版　性と生殖の人権問題資料集成　第二七巻』、不二出版、二〇〇二）。

（6）岡満男、「良妻賢母主義のジャーナリズム」、『婦人雑誌ジャーナリズム』、現代ジャーナリズム出版会、一九八一、三〇頁。

（7）中谷驥一、『色情と其衛生』、青木嵩山堂、一九〇五年、一七五頁（『編集復刻版　性と生殖の人権問題資料集成　第二七巻』、不二出版、二〇〇二）。

（8）三輪田真佐子、「私の女子教育の方針の六箇条」、『新公論』、一九〇八年六月。

（9）「女子の堕落と論客の無責任」、『新声』、一九〇八年五月。

（10）「再び女学生と女学校とを論ず」、『読売新聞』、一八九九年六月一三日。

（11）注（10）と同じ。

（12）川本静子、「〈当世娘〉から〈新しい女〉へ」、『〈新しい女〉の世紀末』、一九九九、一八～二〇頁。

（13）那珂博士、「那珂博士の甥華厳の瀑に死す」、『万朝報』、一九〇三年五月二六日。

（14）「岡山女学校の恐慌」、『読売新聞』、一九〇六年二月六日。

（15）大鳥居弃三・澤田順次郎、「男女の関係」、『男女の研究』、一九〇四年、六一頁（『編集復刻版　性と生殖の人権問題　資料集成　第二七巻』、不二出版、二〇〇二）。

（16）『趣味』（第二巻第三号）、一九〇七年三月。

（17）「女学校風聞記（二）」、『読売新聞』、一九〇七年二月二四日。

（18）注（17）と同じ。

（19）山の人、「現代社会は自然主義」、『新声』、一九〇八年三月。

（20）田山花袋、『明治文学全集　六七　田山花袋集』、筑摩書房、一九六八、八五頁。

(21) 「出版界」、『読売』、一九〇七年三月三一日。『其の女』はすでに明治三四年の『読売新聞』に戴せたが、明治四〇年に単行本として出版された。

(22) 「女子の堕落と論客の無責任」、『新声』、一九〇七年五月。

(23) 山の人、「現代社会は自然主義」、『新声』、一九〇八年三月。

(24) 注（23）と同じ。

(25) 森田草平、『続　夏目漱石』、甲鳥書林、一九四三、五五六頁。